

## 明治・大正期のメディアと働く女性

佐伯順子

みなさま、こんにちは。きょうのテーマは「近代と働く女性たち」ということで、私からは、明治から大正にかけての日本の新聞記事が働く女性たちをどのように伝えていたのかということを中心にお話しできればと思っています。

江戸時代から明治にかけては、一般的な政治の歴史においても大きな激動の時代であるとされ、中学・高校の日本史の授業でも「幕末・明治維新は激動の時代である」というふうに習うと思います。ちょうどいま放送中の大河ドラマ「花燃ゆ」や、前々回の「八重の桜」も、そうした激動の時代を取り上げてドラマ化したものです。

しかし、先ほどの増瀬先生のお話にもありましたように、ともすれば歴史叙述は政治・経済の大きな動きが中心で、それは男性中心の歴史になりがちです。それではいけないということで、女性は歴史のなかでどのような歩みをしてきたのかということについての研究も、近年はだいぶ進んでいますが、きょうは、明治から大正期にかけて、日

本の女性たちの働き方がどのように変わつていったのか、そして、それは現代にどのようにつながつてているのかということをご一緒に考えてみたいと思います。

幕末・明治の男性たちが懸命に頑張つて明治維新を成し遂げただけではなく、日本の女性たちも江戸時代から明治にかけて非常に大きな人生の変化を経験することになりました。それは恋愛のかたちであつたり、結婚のかたちであつたり、働き方であつたりして、日本の女性たちはさまざまな変化を経験したのですが、きょうのメインテーマである「働き方」や「働く仕事の種類」についても、明治以降、大きな変化がありました。ひとくちに言えば、日本の女性の職業の選択肢が広がつたということが、江戸から明治以降にかけての大きな変化と言えるかと思います。

新聞・雑誌という媒体は、現在でも、世の中に何か変化があつたり、

びっくりするような現象があつたりすれば、それを取り上げるのが役割ですが、明治以降の新聞記事においても、女性の職業の選択肢が広がつたことが、世の中にとって大きな驚きであり、それがニュースバリューをもつて伝えられました。現在の日本社会でも、「男女共同参画云々」が言われていますが、明治の末から大正にかけて、つまりまから百年以上前に、「日本の女性つて、こんなにいろいろな職業に進出してきたのだな」ということを、新聞が驚きをもつて、あるいは感動をもつて伝えているという現象は、大変興味深いものです。

たとえば大正三～五年の『讀賣新聞』の「婦人の職業」という連載は、七回も続いています。このように長い連載であり、かつ何年かにまたがつて女性の職業が紹介されているだけでも、当時、女性の社会進出が進み、メディアがそれに注目したことが確認できると思います。連載リストを見ると、電話交換手からタイプスト、鉄道院の事務員、女医、女子校の教師、赤十字の看護婦、三越の女店員、活版印刷女工、女義太夫など、さまざまな職種があることがわかりますが、明治時代以前の江戸時代にも存在した職業と、明治以降に近代ならではの新しい職業として登場してきたものが入り交じっています。

女性は、明治になつて急に働き始めたわけではありません。そもそも、いま「共稼ぎ」という言葉で語られている女性労働というものは、江戸時代にはまったく珍しいものではなかつたということを、私たち

はまず前提として認識しなければいけないと思います。働くないで食べていいける女性は、貴族や一部上流士族の女性で、そういう女性はい

わゆる「奥様」として、生産労働に携わらないことができましたが、それ以外の一般市民の女性は、農作業をしたり、漁村であれば男性が漁でとつてきた海産物を加工するなど、なんらかのかたちで働くのが当たり前で、そういう時代のほうが長かった。それにもかかわらず、最近、マスメディアで「女性の参画」などが取り上げられるときは、「昔の日本の女性は家事と育児しかしなかつたのに、急にこんなに女性が働き始めたので困っている」みたいな誤解をしている人たちが一部にいらして、女性の歴史を正しく理解してほしいとつくづく思います。

女性労働は決して珍しいものではなかつたのですが、現在のメディアにおいては、農作業に従事している方などを「働く女性」と認識しにくく、都市部でオフィスに出勤するような女性しかイメージしないものがあるので、そこには注意が必要です。ただ、きょうの私の話は、近代の働く女性を主題にしておりますので、江戸以前からの、第一次産業に従事している女性や、芸能人、遊女、娼妓などについては詳しく述べお話しいたしませんが、江戸時代以前の女性の職業としては、南座の歌舞伎にもよく出てくる遊女や、芸者さんのような女性芸能人があつて、それも生きるための労働で、女性の生業です。しかし明治以降の女性の職業は、それとは切り離した、近代ならではの職業を指すことが多いので、本日は主にそちらのお話をすることになります。

近代化によつて、どんな新しい職業が出てきたのかと申しますと、女性医師、女性教師、作家、記者、女優、看護婦、女工、店員、女車

掌など、さまざまですが、これ以外にもいろいろな職種があることは、先ほど紹介した『讀賣新聞』の連載をご覧いただければご理解いただけるかと思います。

明治三八年の『東京朝日新聞』に「現今婦人の職業」というタイトルの新聞記事が出ていまして、この記事は、「現今婦人の職業は、長足の進歩をあらはしきたりて、いかなる職業にてもほとんど婦人をみざるなきほどなるが」で始まっています。つまり、明治三八年の段階で、あらゆる職業に女性が進出していると新聞記事が伝えているということです。明治四二年の『東京朝日新聞』においても、文明開化の世になつて、女の職業がだんだん増えてきた。ついには男の領分をも侵すようになつた、という趣旨の記事がありまして、大正三年の『讀賣新聞』でも、「女子が男子の職業の縄張りを侵して、ますますその手を広げ、男子の生業を奪いつつある」と、まるで現代の新聞記事であるかのような指摘がなされていますので、明治の末から大正にかけて、社会的にそういう認識が広がつていったことがご理解いただけるかと思います。

では、具体的に女性はどういう職業に進出したのでしょうか。明治三八年の新聞記事に当時の女性の職業の種類が列挙されているのですが、着物の仕立て、マッチ箱の箱貼り、ハンカチの刺繡、子守、メリヤスの靴下縫製など、いわゆる内職的な仕事が挙げられています。このあたりは後半で松浦先生がお話しされるイギリスの女性の仕事とも通じ合う、たいへん興味深いところで、少し余談になりますが、そういえば私がまだ小さかつた三〇四〇年ぐらい前には、実家の近所に和

服を仕立てる年配の方がおられて、うちの母が時々、着物の縫いや仕立てを頼んでいたことを覚えております。その当時、母の年齢ですと、まだPTAに着物を着ていくことがけつこう多かつたのです。

ただ、この新聞記事では、こういった職業は「いざれも手内職ともみるべきものにて、本業の片手間にもなしうべきことなり」ということで、近代的な職業はそうした内職的な職業とはまた別の種類である、との認識を示しています。そして、その次に「このほか、婦人の高等なる職業」として、医師、看護婦、産婆、宣教師等、つまり、いわゆる専門職と言われるものが、この時代に新しく女性が進出する領域として成立してきたと指摘しています。さらに、鉄道作業局の計算員、乗車券販売員、新聞・雑誌の記者、通信事務員など、「日に増し、婦人の職業界も増えつつある」と書かれています。

内職的な仕事以外に、いわゆる専門職が女性の領域として出てきたということが、重要な指摘としてなされていいると同時に、注目したいのは、記事の末尾に、「現在のところ、婦人の職業として最も下等にして卑しむべきは芸娼妓の類である」と書かれていることです。当時の新聞はものすごくストレートなので、芸娼妓も女性の職業に含めてはいるのですが、とても「下等」なものだと書いているわけです。私は個人的には、そういう職業の女性も、それを生活の手段として頑張っている女性だと思いますので、いちがいに軽蔑するのはよくないと思つていますが、ただ、この新聞によると、そうした職業に対しても、よくないという否定的な価値判断を下しているという点で、女性の性の商品化を批判する認識が生まれていることに注意しておきたいと思

います。

こうした女性の職業の全体的な概観があることをふまえたうえで、さらに新しい職業としての専門職がどのようなかたちで登場したかとということを新聞記事から確認してゆきたいと思います。

まず女性医師ですが、ご紹介したいのは明治四五年の『讀賣新聞』です。当時の『讀賣新聞』には「新しい女」という連載シリーズがありました。そういう連載があること自体、女性の生き方や職業が新しくなってきたからそれを報道で伝えようという姿勢を現すのですが、パッと目をひくのは女性医師が開業医として小児科の診察をしている風景を捉えた写真です。高浜虚子の姉で未亡人のいく子さんが下宿業を営んでいる家は、『ホトトギス』の発行所でもあり、その家で、いく子さんの娘である澄子さんがこの年の三月から小児科を開業した、ということが新聞記事になっています。

近代的な意味での女性医師が歴史的にどのように誕生したかと申しますと、まず荻野吟子さんが、気の毒なことに最初の結婚でパートナーの方から性病をうつされてしまします。いわゆる婦人科の病気にかかった女性が男性医師にかかるのは抵抗感がある、ということを身をもって感じた吟子さんが、「私が医師になつて、女性の患者さんを救おう」と、社会貢献の意欲に燃えて、医学を志しました。これは歴史的な事実に即して新聞記事としても報道されています。

その記事を読みますと、結婚後に性病にかかる、全快したけれども、「同人づく／＼思ふに世上の女子にして子宮病を患ふる者多けれど内部局所の病ゆゑ治療を恥ぢ恐れて：買薬などにて捨置くゆゑ終に重症に陥るなり。女医師あらば療治を乞ふに恥もなく患者の幸ひならんと夫より志ざしを立て女医たらんと欲し」と書かれています。新聞報道を読むときには、「本当にそういうことがあったのか」と

いうような信憑性を疑う要素や、捏造報道の問題が言われますが、この記事は本当です。新聞が荻野さんを美化しようとしたわけではなくて、客観報道でありながらも、新しい職業に就こうとする女性を応援しようというメッセージも感じられるような記事になっています。

荻野吟子さんが開業したことに勇気を得て、鷺山彌生という女性がいまでも「女子医」と呼ばれる女性のための医大、現在の東京女子医大を設立します。鷺山さんが医学を志したとき、女性は少数派でしたから、女性のための医学教育をとの動機づけによって「女子医」を創立したという経緯があります。

ここで注意しなければいけないのは、女性が働く明治期特有の理由として、「女性のために、女性が立ち上がらなければならぬ」という、強い社会変革と社会貢献の意志が働いていたということで、私自身もとても励されます。荻野吟子さんも、鷺山彌生さんも、「女医第一号になつて、社会的に目立ちたい」という理由で活動したわけではなくて、自分自身がからだや心の痛みを感じたときに、「これではいけない」という改革への強い思いを抱いて、立ち上がつた。歴史に名前を残したいとか、社会的に名前を出したいといった不純な動機ではなく、純粹に医業に自分の身を捧げようと考えたわけですし、社会の変革期だからこそ、純粹にそういう思いにかられて、女性の職種を広げようとしたのだろうと思います。

いまは社会が豊かになつてきたから、逆に「目立ちたい」という余裕も出てくるのでしょうかが、そうではない時代に女性たちがいかに努力

力したか、それが明治の女性たちの生きざまや職業選択の変化に現れているところがとても感動的なところかなと思っています。

ここまで近代的な職業の特徴をご紹介してきましたが、最初に申し上げたように、女性たちは江戸時代以前にも働いていました。その例を第一次産業にとりましたが、他の職業でも、女髪結いといった職業が存在していました。髪結いといえば日本髪ですが、日本髪は非常に専門的な技術を要する結い方ですので、なかなか一人では結えません。髪(ひん)、鬘(たば)、髻(まげ)という複雑な構造をしていますので、髪結いは着物と日本髪には必須の職業でしたし、この職業は明治以降も残りました。

しかし、明治以降、日本髪は少しずつ廃れてしましましたし、男性の髪形は見事にちよんまげからザンギリ頭になりました。そうすると、ちよんまげを結う仕事を生業にするのは難しくなります。ところが、幸か不幸か、女性のいわゆる日本髪は、男性のちよんまげよりは長く生き残りました。

文明開化の動きのなかで、明治一八年にできた「婦人束髪会」によつて、「日本髪は不便で、窮屈で、不衛生で、女性が文明開化の社会に進出するときになんな髪形はよくない」という批判が起つて、同じ長髪ではありますが、いまでいえば三つ編みやアップにした髪形など、「より簡便なまとめ髪にしましよう」という動きが起ります。

その動きを察知した髪結いの人たちが、「こんなことになつたら私たちの仕事がなくなつてしまふ」と強い危機感を抱いたという新聞記事

も存在しています。東京で束髪会ができたので、大阪の女性の髪結いさんたちが「この動きが大阪にも来たら困る」というような状況があつた、という新聞記事も存在するのですが、髪結いさんたちはただ黙つているのではなく、「じゃ、新しい時代に即した髪形とは、どういうものだろう」ということで、一所懸命に工夫していたのです。

彼女たちは「時代に即した新しい髪形をつくろう」というような努力もしていましたし、意外に日本髪も廃れなかつたので、髪結いの仕事は思つたより長く続きました。いまでいえば「カリスマ美容師」とでもいすべき、「カリスマ髪結い」の人たちが固有名詞で何人か、新聞記事に登場しています。

たとえば女髪結いの愛子さんという方を取り上げた記事があります。

いまのカリスマ美容師さんであれば、いかにおしゃれにヘアスタイルをつくりあげるかという点がメディアで注目されるケースが多いかと思いますが、愛子さんに関しては、もちろん技術もよかつたのですが、彼女の生きざまが一度ならずメディアで注目されました。

記事は、新橋の女髪結のなかで手腕ありといわれる愛子さんという人が、九歳のときに愛知県から上京して、奉公口を求めて苦労するうち「女で独立するには髪結が近道ならん」ということで、京橋区の女髪結いさんのところに「住込みしは一四歳の春なりし」となります。明治時代には、女性が働くのは当たり前という感覚がまだあつたので、九歳で上京して、奉公口を求めた。そこでどういう仕事に就けばいいかと思い悩んだときに、女性が経済的に自立するためには髪結いとい

う職業がいいのではないか、女性の技術職として適職ではないか、という判断のもとに、髪結いをしている女性のところに住み込みをして、修業を積んだのです。

明治期には、一〇代で働くのが当たり前という女性たちがたくさんいたので、愛子さんは三年間、修業をして、新橋にお嬢さんあり、と言われるほど繁盛するようになりました。会場のみなさまは女性史に関心の高い方だと思うので、「女性が一〇代で働くのが当たり前だった」とお話ししても疑問に思われないかもしれません、二一世紀の広い世間を見渡してみると、こういう時代があつたことを忘れていらっしゃる方も意外に多いので、ここはあらためて強調しておきたいところです。

さらに、愛子さんが一七歳で一本立ちをしたときに、付き合つていた相手は「法律研究中なる」男性で、それを「理想の良人と定めて同棲せり」と、記事は書いています。何がニュースバリューになつているかというと、彼女が自分の彼氏を一人前の法律家にするために、彼女の収入で生活を支え、一人前の弁護士にしたということです。彼女の支えで「去る三十一年中北村は二十五歳にて弁護士試験に及第」ということで、夫を司法試験に合格するまで支えたことが美談として報じられています。こういう話は「内助の功」という表現で語られがちですが、彼女は自分で生計を支えていましたので、家事、育児で夫を支えるという現在のニュアンスとは少し違っています。

また、これだけなら現在でも似たようなことが時々あるかもしそれま

せんが、記事の後半は「髪結の愛子は一転弁護士夫人となれり。されども彼女の性質は弁護士夫人を以て満足せずなお梳櫛を手より放たず新橋にその声名を続けたるが云々」と続きます。ここは、現代女性の価値観と分かれてくる部分があるのかなと思うのですが、自分が働いて支えた夫が弁護士になつたとき、いまなら「じや私はもう仕事を辞めるわ。あなた、稼いでね」というパターンがけつこうあります。

現代の女性雑誌などを読んでいると、夫が出世して、自分は家庭で趣味に勤しんでいるというような女性が「理想の奥様像」として取り上げられることもままあると思いますが、愛子さんの場合は、「夫が出世したから、私は仕事を辞めるわ」ではなくて、「私は仕事を続けます」という選択をしています。夫の職業の有無にかかわらず、働く意欲が強い女性で、実際、彼女の腕がうもれるのは、社会的にも損失であったと思いませんので、続けるのは彼女自身の希望をいかすのみならず、社会にとつても有益であつたと思います。

しかも、この夫が先に亡くなつてしまつて、愛子さんはものすごく悲しむのですが、夫が亡くなつても生計の心配はないわけですから、実際、家計のリスク管理としても結果として彼女の選択は正しかつたということになります。亡くなつた後も若手の法律家志望の学生さんたちに自分の収入で学費を援助し続けたことが、さらに美談として報じられています。彼女は、「弁護士夫人」という肩書に安住せず、妻の側も、夫に何があつても自分で収入を得る準備をしておいたほうがいいという考え方をもつてゐる女性ですし、さらに、自分がキャリアを中斷しないことで、個人奨学金給付のような社会奉仕を実践したわ

けですので、そこがニュースバリューになつてゐるわけです。

ニュースバリューとして認められているということは、逆にいえば、そういうことがしょつちゅう起つていていたわけではないという見方もできます。ただ、最近は「非婚化」が言われ、「男性の収入が減つたから、家族を養えないから、結婚できない男性が増えている」という議論がまことしやかに流れていますが、それなら女性が稼げばいいわけです。それを明治時代に愛子さんは実践していたのですが、この点では、愛子さんはそれほど例外的ではなくて、働く女性が親きようだいなど、家族の生計を支えているという事例はたくさんあります。女性が生業を担うという意識は、少なくとも新聞記者を見る限りは、現代よりもむしろ明治時代のほうが明らかに強かつたと思います。

「東京の女」シリーズも、とてもおもしろい連載でして、その一七回目に「当世女髪結振」という新聞記事が紹介されています。そこに出てくる関口さんという女性も、当時、愛子さんと同じぐらい有名だつた髪結いさんで、さまざまなお客さんにたいへん人気があつたということも紹介されています。当時の新聞を見ると、関口さんと愛子さんはメディア的にもとても有名な髪結いさんだったことがわかりますが、このような歴史は歴史の教科書には出にくいのです。女性医師の荻野寅子さんや鷺山彌生さんなどは、女性史を多少かじつていればご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、髪結いさんで活躍した女性たちのことは、女性の歴史にもそれほどしょつちゅう登場する人たちではありません。でも、女性史上では、これまで知られている

「有名人」と同じくらいに注目すべき女性たちではないかと思します。

次は看護婦さんです。お医者さんが男性中心というのは現在でもそうですが、一九七〇年代の統計では男性医師を一〇とすると女性医師は一割ぐらいという状態です。二〇一五年のいま、医学界における女性医師の割合は一五%ぐらいで、この問題も解決されていませんが、看護婦さんに関しては「女性職」という考え方が明治時代からありました。

なぜかというと、看護婦さんは傷ついた患者さんの手当てをするという立場ですから、一種のケアの担い手です。いまも、自分の心身に何らかの障害や問題を抱えている子どもや親に対して、女性が介護・看病・育児といったケア役割を中心的に担うことが社会問題化して久しいわけですが、人のからだや生活の世話をする役割は女性の領域だと見られがちであるという傾向は、看護婦さんの職業を「女性職」とみなす暗黙の前提になっています。看護婦さんという職業も、近代の医学の発展とともに、最初は女性職として認識されて、長年、そのまま続き、「看護婦」という単語がやつと二〇〇二年三月から、男女含めて「看護師」に変わったというのはご存じのとおりです。

近代的な看護婦さんの養成制度ができる以前の明治一四年に、西南戦争で、現地の増田さわざんという女性が、正式な看護婦さんというわけではありませんがボランティアで、戦争で痛手を負った人たちの世話を一所懸命にしたということが新聞で報道されました。この女性が勇気をもつて、戦場で傷ついた人を看護したということで、美談と

して明治一四年に新聞に報じられました。

したがって、看護をする女性の歴史 자체は、明治のわりあいに早い時期からメディアで注目されていたのですが、近代的な看護婦養成が徐々に制度化されていくなかで、女性にとつてのひとつの理想の職業のよう位置付けもなされていくようになります。

それはなぜかというと、ひとつは看護職が女性の適職であるという考え方もあり、当時の皇后陛下が自ら赤十字の篤志看護婦人会を奨励され、皇后陛下を筆頭に皇族・華族の方々が赤十字に関わって、女性職としての看護職を奨励したことが背景にありました。そのため、明治時代の看護婦さんの方々は社会的にも一定の尊敬を集めている存在となっていました。

メディアでどのように紹介されているかというと、たとえば東京慈恵医院の看護婦さんが留学したという記事があります。そして、いま申し上げたように、女性にとって憧れの職業というような位置付けにもなっていますので、「叙勲三看護婦」という見出しの記事で、叙勲された記事もあります。二〇一三年の大河ドラマでも、新島襄の妻の新島八重が看護婦として活動したことが評価されて、勲章をもらつたという場面が最後のほうに出てきましたが、新聞でも三人の看護婦さんが叙勲されたことが取り上げられています。

明治期には、女性の社会進出を評価する動きのなかで、看護婦という職業が強い存在感を放っていました。いま風にいえば「セレブの後ろ楯」があつたことが、こういった動きに強く影響を与えていたのですが、「風薫る快晴の皐月二日 赤十字総会を開く」という見出しに

写真入で、「皇后の宮清々しき御洋装にて親しく日比谷の会場に臨御」という記事も載っています。これは非常に象徴的な記事ですが、洋装という当時最先端の風俗に身を包んだ皇后が赤十字を後押ししているわけで、明治期において、この種の写真入り記事はほかにもいくつか見ることができ、かなり華々しく報道されています。

女性が留学する機会も、鷗外や漱石のような帝大の男性に比べれば当時は少なかつたのですが、その貴重な機会を、看護職に就くことによつて得ることができるというのは、それが国際職だからということもあつたと思います。たとえば髪結いは日本だけの職業ですが、看護という仕事は赤十字が国際組織であるように、国際的に認知された職業であり、そこに日本社会も連なつていくんだという意識が明治の国際化、近代化における社会的な背景としてあつた。日本が国際社会に組み込まれていくなかで、赤十字の一員になることも日本の近代国家としてのステータスであると思われましたので、女性の社会参画を促すだけでなく、当時ならではの看護職に対するある種の国家事業的な要素もあつて、看護婦さんの活躍がメディア的にも注目されたのだろうと思います。

ただ、看護婦さんの歴史を読んでいると、そういう表の部分は何度か出でますが、当時の新聞は、そういうた華やかな側面だけでなく、仕事としてはかなりハードな部分もあつて、そのことによつて苦しんでいる女性もいたし、重労働のわりには必ずしも十分な収入が得られるわけではない…といった実態をかなり赤裸々に伝えていています。

それを示すのが「悲惨なる看護婦生活」というタイトルの、『東京朝日新聞』の連載記事です。「悲惨なる看護婦生活」というタイトルで何回か連載が続いてしまうこと自体が、苦労されていた女性たちが少なからず存在したことを伝えていますが、「世にはこの看護婦社会の内情についてとかくの噂も絶えないのも不思議である」と、奥歯に物が挟まつたような表現があり、「彼らのなかには立派な手腕と品性とを備へた人たちもある」けれども、そういう女性たちは少数派であるという記述も出てきます。品行方正な看護婦さんもたくさんいるが、必ずしも全員がそうではない、というのが記事の見解です。

この記事はちょっと誇張しそぎかなとも思いますが、看護婦さんの職業実態を伝えようとするルポルタージュ的な筆致で、重労働のわりに収入が十分ではないので、お小遣いを稼ぐために、副業的に売春的な仕事をしてしまうという記述や、経済的に苦しい友人に同情して万引きをやつてしまつたという看護婦さんの記事もあります。これらはあくまでも記事が伝えることですので、当時の新聞記事は、現在のように厳密に取材をしていない場合もありますので、確実に事実とは言いくらいの面もありますが、お互に苦しい生活のなかで、助け合いたいという思いが、やむを得ず万引きのような犯罪的行為に結びついてしまつたことは、可能性としてあつたのかもしれません。

看護婦さんの表向きの歴史では、もしかすると伝えきれないような生活実態のようなものを、当時の新聞記事が伝えているとすれば、そこには留意してもよいかなと思います。

次は女性作家です。なぜ女性作家が近代特有の職業かと、必ずしもそうではありません。式部や清少納言など、国語の教科書に載るような「ものを書く女性」は、日本には古くから存在していましたが、彼女たちがものを書くことで収入を得て、経済的自立をしようといったモチベーションに突き動かされていたかというと、必ずしもそうではありません。

ところが、明治以降の女性作家のなかには、ものを書くということを生業として捉える考え方が出てきました。その代表的な存在に樋口一葉があります。なぜ樋口一葉が作家の道に進もうとしたかというと、父親も兄も早くに亡くなり、経済的に困窮したので、母親と妹を彼女が支えなければいけなくなつたとき、彼女に文才があつたから、その原稿料でなんとか生活できないかという可能性を模索したわけです。

さきほど申しましたように、若い女性が生計を支えること自体は、当時としては決して珍しいことではありません。髪結いになつてもいいし、女工さんになつてもいいし、子守をしてもいいし、いろいろな職業選択肢がありました。一葉としては自分の得意分野を活かすとともに、当時、女性が作家として原稿料収入を得ることが可能な社会になつたことも歴史的背景として重要な点であると考えることができます。

女性職業作家が誕生する背景として、近代化の過程のなかで女性の教育水準が上がつたことが、アメリカの女性作家誕生の背景としても指摘されています。教育水準があがれば当然、読んだり書いたりする能力が全般的に底上げされていきます。底上げされた読み書き能力のなかで、特に突出した文才のある人たちは、ペンと紙だけで生活を支

えることができるかもしれないという可能性が出てきました。明治日本の実業界や政治の世界はかなり男性中心の社会でしたから、先ほど髪結いのお嬢さんにとって、彼女自身が弁護士になるのは難しいわけで、結果として、間接的に法律界をサポートするかたちになつたのだと思います。でも、作家の場合は、そうではなく、女性自身がなることもできたわけです。

一葉の場合も、高等教育を受けたかつたけれども、母親の反対で小学校だけで終わらされてしましましたが、小学校しか出ていなくても、作家はいわばフリーの職業なので、文才があつて、いい作品を書いたら売れるかもしれない。男性のように帝国大学に行けなくとも、いいものを書いたら、それが社会貢献にもなるかもしれないし、収入も得られるからそれないし、同時に自己表現もできる。イギリスの女性作家のヴァージニア・ウルフが「女性にとっての職業」というエッセーのなかで、「ペンと紙と執筆のための小さな空間だけあれば成立する作家」という職業は、女性の適職であると言っていますので、それと似たような現象が日本の近代にも起つて、作家という職業が女性の職業のひとつとして認められていく時代だつたと言えます。

明治から大正の新聞記事を見ていくと、いまはそれほど有名ではないような作家の記事もたくさんあります。当時の新聞記事には、現代とは違う面白い写真や記事が多くあります。子どもが寝ている横で女性作家が裁縫をしている姿を映した写真がありまして、その見出しには「新年物をかせぎ上げ、子どもの春のお支度に」とあります。子育てをしながら作家業もしているという女性の状況を、この記事は写真

とともにリアルに伝えていいるのです。

現代の日本の女性作家ですと、あまり家庭のことを話したがらない方もいらっしゃいますし、逆に、パートナーの「カモカのおつちやん」のことを作品にも書かれた田辺聖子のように、家族のことを積極的に話す方もおられます。意外に、飾り気のない日常生活の風景は、雑誌や新聞記事に出てこないような気がいたします。林真理子さんがかなり以前に、エッセイかなにかで、子どもを売り物にしたくないので、出産はしたけれども、今後、子どものことを書くつもりはない、という趣旨の発言をされていた記憶がありますが、それもひとつ見識であると思います。ただ、明治・大正の女性作家にとって家族や家庭のことは、ことさら隠すものでもないし、ことさら露出するものでもないし、自然体で、「こういう生活のなかで作品を書いていますよ」というスタンスがみられます。肩肘をはって創作と家庭生活を両立させているという姿勢もあまりみられず、本当に飾り気のない女性作家の日常生活が淡々と報道されています。

つまり、明治の末から大正の初め頃は、母親が働くことが、作家業に限らず、メディア的にも珍しいことだと思われていないので、むしろ「母親が働いて何が悪いの?」という感じなので、そういう報道が成り立つということです。創作活動と家事・育児を両立させた女性として、現代でも有名な与謝野晶子さんは、世間的には『みだれ髪』が有名ですが、ほかにも小説や評論を書いたり、文化学院で教育者として活動したり、さまざまな活躍をしていました。子供もたくさん育てましたが、そのあたりの赤裸々な状況が、さきほどの連載「東京の女」シリーズの九回目で取り上げられています。

このインタビューのときの状況は、いかにも与謝野晶子さんらしい華やかな着物とされていますが、「晶子女史は二階の部屋で愛児を遊ばせながら某新聞の切り抜きに鋏の手元が忙しい。派手な花模様の浴衣に：大髪を結い：この頃は五人の子供で夜は寝られない。心身共に疲労している」と書かれています。その先の描写はかなりリアルで、長男は歯の具合が悪くなつて、痛い痛いと泣きじやくつていて、次男は平気で新聞紙を弄ぶ。去年生まれた三女は女中さんに抱かれて二階に上がりつたり下りたりする。とにかくお子さんたちが周りで騒ぎ回り、一人が病氣をすると、また一人が病氣をする。一方が泣くと、また一方が泣く…というふうで、もう本当に大変だという状況がてらいもなく報じられています。

私たちが一般に抱く晶子のイメージは、『みだれ髪』の優美で奔放な女性歌人ということになりますが、当時の新聞記事を見ていると、子どもを育てながら、文字通り髪を振り乱して日常生活を送っている、いわゆる「生活者」としての働く女性の姿が等身大で出ています。こういうものを見て、最近の新聞や雑誌の記事と比べてみると、いまの女性作家は、きらびやかに着飾つて出かけたり、家庭の記事でも、おしゃれに演出したような場面しか露出していないような印象がありますが、明治・大正期においては、報じられる作家のほうもそれほど気取つたりしないで、自分の生の生活をメディアにさらけ出して、むしろ微笑ましい様子がみられるような気がいたします。

繰り返しになりますが、なぜそれが可能になつたのかというと、当

時は働く母親が当たり前だつたからです。現代社会では、週刊誌に女性アナウンサーのスキヤンダラスな記事が出る場合、「仕事が忙しいので、夫にごはんをつくつてあげていらない」とか「子どもの面倒を見ていらない」「それが離婚の原因になつた」といった書き方をしている例がままあります。それは一面の事実かもしませんが、明治・大正期には、そういう考え方自体があまりないし、夫の鉄幹にも、「うちの嫁は創作活動や評論活動をしていて子育てを十分しないからいやだ」というような気配はありません。鉄幹もいわばフリーの身ですから、必ずしも十分な生活費はなく、妻が稼いでくれるのがありがたいというのが本音で、そこは今のディアの論調のように、妻の稼ぎで暮らす鉄幹を悪くいう様子もありません。

ただ、作家活動と家事・育児の両立は、一人では物理的に難しいし、夫と二人だけで多くの子供を育てるのも難しいので、記事にあるように女中さんがサポートをしています。女中さんという職業も、当時の女性にとってポピュラーな仕事で、明治から大正あたりの雑誌記事を見ていると、主婦の方の心得として、子育ての仕方や料理の仕方のほかに、女中さんをどうやって使うかということもしばしば書かれています。その意味では、家庭の状況が現在とは違つていたという背景もありますが、現在の新聞記事では女中という単語は使えなくなっています。ただ、歴史的事実としては、女中さんのサポートも含めて、女性の理想の生き方・働き方が現代とは違つていたことが、女性作家の報道の仕方を見てもわかるのではないかと思います。

女店員という職種も、当時、とても注目されました。明治の末から大正にかけて、消費文化が発達するなかで、「今日は帝劇、明日は三越」というキヤッチフレーズが、発達した消費社会を象徴するものとして取り上げられます。その三越呉服店が女性の店員さんを採用したということは、女性史の面でも出でますが、当時のメディアでもたいへん注目されました。新聞にも三越呉服店の女店員募集の広告が出ていますが、店員さんが写真入りで、華やかなイメージで紹介されています。こういう状況を見ても、新しい時代の新しい職種として時代の注目をあびていたことがよくわかります。

女性店員が注目された理由にはいろいろな要素がありますが、呉服を含めてファッショニ系の商品を女性のお客さんに勧めたり、買つてもらつたりするには、男性店員よりも女性店員のほうがいいのではないかという考え方がありました。先ほど、看護婦さんを女性職とする根拠として「女性はケア役割に適しているから」という考え方があつたというお話をいたしましたが、現実には、雑な女性もいれば、丁寧な男性もいますので、本当に看護師が女性にとつて適職なのかというと確實ではなく、かなりジエンダー的なステレオタイプが入つていてのではないかと思います。しかし、女性店員に関していえば、女性が身の回りで使うものや身につけるものについては、女性店員のほうがいいアドバイスができるのではないかというのは、もつともな理由です。つまり、女性に対するサービスを向上させるとつとして重要な理由が、女性店員が採用されるようになつた合理的な要素のひとつとして重要だと考えられます。

結果として、女性店員はとても優秀だという評判が上がりました。「女性店員さんに勧められたほうがお買い物もしやすいわ」という評判が新聞にも載っています。ですから、当時の三越の経営者側は「こんなに優秀な女性店員はずっと働いてほしい」と思っていました。ところが、経営者側は仕事を続けてほしいのに、女性のほうが辞めてしまう。仕方がないので、辞めることを前提に経営者側も雇い方を考えなければいけなくなつた：との証言が、女性史の本（村上信彦『大正期の職業婦人』）に書かれています。

これは非常に重要な点だと思います。いま、私たちが「男女共同参画」ということを政治・社会・文化の面で考えるときに、「オジサンの経営者が女性を抑圧して、働きにくくするから、女性がどんどん辞めていくんだ。もつと女性が働きやすくするためには、男性の方の理解を求めなければいけない」という議論になります。これは一面の真実ではありますが、女性の働き方の歴史を考えてみると、むしろ女性のほうが積極的に辞めていったという歴史的な問題が見えてきます。

さきほど紹介した、村上信彦さんの『大正期の職業婦人』では、三越の例を取り上げて経営者側の意図に反して、女性の側が辞めてしまつたとの指摘があつたのですが、そうなつた理由として、「大きな決定的な障害は、妻の外働きに夫や姑が反対したことである。一般労働者階級では其稼ぎは昔から普及していたから、珍しい現象ではなかつたが、いわゆる中産階級では、妻を働かせることは扶養者の権威を傷つける恥ずかしいことで、家の体面に関わる外聞の悪いことだつた」

た。家長はあくまで一家を養うことによって、一家を支配するのである。妻が外で働いて収入を得ることは、その原則に反することであり、また妻の自主性を多少でも認めることになるから、許すことはできない。それで生計が立たないなら、むしろ家で内職するほうがましだった」とも指摘されています。

これは現在でもありがちな、大変重要な指摘だと思います。「労働者階級」という概念がイギリスのそれとイコールかどうかということを、後ほど松浦先生とお話しさせていただければと思いますが、最初に申し上げたように、農林水産業で働いている女性たちが普通だつた時代から、近代化に伴う産業化や貨幣経済の進展に伴つて、職場と家庭空間の分離がだんだん大きくなり、そうすると一方が家事専業、一方が生産労働に携わるという男女の役割分業が起こり、その役割分業は必ずしも男女に当てはめる必然性はなかつたかもしれないのに男女に割り当てられた：という歴史的な経緯があります。

何年か前に、女性研究の草分けの世代の富士谷あつ子先生や男性学の伊藤公雄先生などが中心になさつているジェンダー学会で、ドイツの二〇～三〇代ぐらいの夫婦の働き方と育児の仕方にについての発表をうかがつたことがあります。ドイツ社会全体のフィールドワークではなかつたのですが、その発表者のドイツ人の女性は、彼女が住んでいた地域の何組かのカップルに「家計や育児はどうしていますか」というインタビューをした結果、夫婦が働いていて子どもができた場合、賃金が高いほうが残り、賃金が低いほうが仕事を辞めて家事・育児に回り、それは男女に関わりない、というレポートをしていました。

これを歴史的にどう見るかは南先生がご専門なので、ドイツの歴史一般やそれがドイツの全地域に当てはまるかどうか、またご教示いただければ幸いなのですが、少なくともそういう状況に比べると、日本の歴史は全然違う方向に行つてしまつて、明治の末から大正期にかけて日本女性は、たとえ女性が会社で有能でも、高給を取つても、「結婚したら、家族を養うのは夫の役割だから、私が出しやばつちやいけない。辞めなきや」という考え方方に染まつていったことが見てとれます。

しかし、さきほどお話したように、明治の半ばぐらいまでの女髪結いさんには、そういう考え方がないんですね。自分が稼いで、夫を弁護士にした。結婚しても、夫が亡くなつても、髪結いを続けることに対して、「そういうものだ」と本人も考へていて、新聞もそういうふうに報じています。

これはおそらく階級的な問題とも関わつてくると思ひますが、だんだん女子教育が発展すると、教育を受けた女性であればあるほど、教育を受けていない女性がやるような職業には就きたくないというような差別意識が女性のなかに出てきてしまつます。ですから、医師や看護師など、近代特有の専門職であれば場合によつては続けるモチベーションにもなつたかもしませんが、そうではない職業と見なされてしまつた場合は、あえて続ける必要はないという考え方がある時代から出てきてしまうのです。

私も調べていて不思議と申しますか、残念でならないのですが、明治の末から大正にかけてといえば、まさにモダンガール、モダンボー

イの時代で、女性が髪を切り、ショートヘアで洋装で闊歩していた時代と言われています。それにもかかわらず、実態として働く母親に対する偏見、結婚した後も働き続ける女性に対する偏見は強まつていきますし、女性自身もそう思つています。教育を受ければ受けるほど、「私が受けた教育は、妻として、母として、子どもや夫に尽くすためのものなのだ」という考え方方が強まつてしまつのです。皮肉にも、消費文化の発展・女子教育の展開とともに、生涯キャリアという考え方が明らかに退化していく現象がみられます。それが現在にまでつながつてゐるということで、男女共同参画がいいという立場に立つた場合には、非常に残念だと言わざるを得ません。

イギリスの場合、ヴィクトリア朝に「家庭の天使」という考え方があつて、ヴァージニア・ウルフは、「家庭の天使」という理想と戦う苦労が大きかつた、と書いていますし、「家庭の天使」になれないので自責の念にかられるという考え方には、日本の女性でも少なからず共感してしまつ面があると思ひます。

ところが、与謝野晶子は「何でもあり」という感じです。与謝野晶子は、おもしろい人で、現代の視点からは保守的にみえる評論もあちこちに書いていますが、子育てしつつ仕事もしています。現代的な視点からは矛盾した存在にもみえますが、いずれにしても、子だくさんで、小さな子どもが周りで遊んでいるような状況で執筆していることをごく当たり前に受け入れていたし、メディアもそれを普通に報道していました。その点は現在とはまつたく違う、ということは確実に言えかなと思います。

そのほかに、当時、注目された新しい職業のひとつに女車掌があります。交通インフラの発達に伴って、女性が車掌としてバスに乗り込むことも出てくるのですが、この仕事もたいへん重労働だたと言わっています。たとえば「女車掌の鈴木ふきさん」という記事では、バスという交通手段がたいへんハイカラなものとして注目されたこともあり、当時、東京を走っていたバスは「円太郎」という愛称で呼ばれ、女性車掌がハイカラな制服で乗っていることがメディア的に注目されて、採用試験に女性が殺到したことが新聞で報じられています。

ここで注目したいのは、「夫を勉強させるための女車掌もある」という見出し付きで、女髪結いの愛子さんと似たようなモチベーションで仕事をする女性が、女車掌という新しい職種のなかにもあつたということです。時代が進んでも、家族やパートナーを支えるというモチベーションで仕事をする女性が、女車掌という新しい職業のなかにもあつたわけです。駅の出札係も、新しい交通手段が提供した新しい女性の職種です。鉄道の出札係に女性が採用されたということも写真付きで報じられていて、当時の職業に就いている女性の連載記事「腕の女」では、弟の教育費を出すために働いているという動機づけが語られています。

余談になりますが、同志社大学のOBで、兵庫県在住のご年配の方とお話ししたとき、「ぼくは、兄や姉、妹が地元で農業をして、その収入からぼくの学費を出してくれたから大学を出ることができだ」とおっしゃっていました。農業であれ、出札係であれ、家族のために労働する女性が実態として語られているし、実際にそういうお話を身近

にうかがうこともできたのです。

鉄道関係の女性についていえば、ある種のステレオタイプ的な考え方であります。男性の出札係の場合、切符代を払ったかどうかなどでケンカになつてトラブルが絶えなかつたのに対して、女性の出札係は対応がソフトなので乗客の受けもよく、鉄道局としてもわりやすい積極的に採用するようになつたと書かれています。

似たような現象としては電話交換手もそうとして、アメリカの電話の歴史の本でも同じようなことが書かれています。最初は男の子が電話交換手をやつていて、その対応が乱暴だったので、客たちが「あの男の子たちをどうにかできないか」という苦情を電話会社に送り、会社も困つて女性の交換手に変えたら、苦情が減つたという話でした。日本でも、電話交換手が一時、女性職になりますが、女性の対応のほうがソフトだし、客受けがいいと当時の日本のメディアにも書かれていました。

これまでに共通する特徴としては、接客業・サービス業系の職種は、よくも悪くも、対応がソフトだという評価を受けて、女性が進出しやすかつた、という歴史的な事実をあげることができます。

ただ働くほうの女性の立場になつてみると、鉄道局で働いている当時の女性のインタビュー記事として、切符代と乗った記録の計算が合わない場合は係の女性が弁償しなければいけないことがあつたと書かれています。それは計算間違いなのか、客がうまく踏み倒したのか、

新聞記事にははつきり書いてありませんが、いずれにせよ、マイナスが出たときは係が弁償しなければいけないので、それが大変で辞めていく女性もあったということです。

現在、ＪＲなどで働く女性が増ええていて、それは必ずしも女性のサービスがいいとか対応がソフトだという考え方ではなくて、ジェンダー平等を意識してのことだと思いますが、初期の鉄道界への女性の進出としては、やさしさというステレオタイプな「女性らしさ」を求める女性観が働いていたと言えます。同じようなことがイギリスでもあるのかどうか、ぜひ教えていただきたいと思います。

女工さんについては、『女工哀史』などで比較的知られているので、本日はあまり知られていないと思われる職種や人物を中心にお話ししましたが、もちろん、女工さんに関しても、近代化に貢献した女性として社会的に評価されたり、つらい労働条件について女工さん自身が声をあげたという新聞記事もあります。

女優も、新しく出てきた職業として当時は注目されまして、松井須磨子さんや森律子さんに関しては、演劇史でも比較的知られています。

江戸以前からあつた芸者さんという職業は、いまの祇園に芸妓さんや舞妓さんがおられるように、現在も存続していますし、明治時代にはもつとたくさんおられました。

本日のまとめといたしましては、近代初期の働く女性たちの動機づけは、自己実現や社会で目立ちたい、名声を得たいということではなく、「女性の患者さんを救いたい」とか「家族を支えるために」というふうに、「他者のためになる」という気持ちが大きかつたと思います。

しかし、時代が新しくなればなるほど、そういう動機づけが失われ、社会全体が豊かになると、男性一人の稼ぎで生計を成り立たせることができるように状況になっていくので、そのことが女性の労働参画に対するマイナスに働きました。働く女性や働く母親についてのイメージが変化し、結婚退職が理想化されていくのは明治の末から大正にかけてで、女髪結いの愛子さんの時期にはそうではありませんでした。一般に現代では、「結婚したら退職し、専業主婦になれば、良妻賢母になる」という女性イメージを抱きがちですが、今日は、むしろそうではない時代のことを知つていただきたいと思いました。

キザなことを言うのですが、「世の為、人の為」という気持ちが明治の半ばぐらいまでの働く女性たちの間にはありました。そうした明治の「ハンサム・ウーマン」に学びましようということを申し上げて、私の話を終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。